マレー語古典文学作品の世界
― 国立国会図書館関西館所蔵のカルヤ・アグン叢書の紹介 ―

冨田　暁（国立国会図書館関西館アジア情報課非常勤職員・岡山大学客員研究員）

はじめに

19世紀末から20世紀初めにかけて西洋文学の影響によって小説などの近代文学が成立する以前から、マレー世界[1]はマレー語の古典文学の長い伝統を有していた。

マレー語は、多言語の東南アジア島しょ部で地域を跨いだ共通語として歴史的に使用され、現在のマレーシア語やインドネシア語の原型となった。マレー世界ではインド系の文字が古くからもたらされ碑文も残されているが、文献によるマレー語古典文学作品の登場は、現存する限りでは、13世紀末以降のイスラームの広がりと重なる形でアラビア文字が新たな表記文字となっていった時代からである。アラビア文字表記のマレー語はジャウィ（Jawi）と呼ばれ、ローマ字表記のマレー語はルーミー（Rumi）と呼ばれる。一方で、マレー語口承文学の伝統は文献によるマレー語文学よりも古く、歌謡、舞踏、演劇などのような舞台芸術とも結び付いた形で発展した。そうした口承文学は文献文学の登場以後も民衆の間で特に盛んであり続け、宮廷エリートが主な担い手であった文献文学と共存して互いに補完しあう関係にあった。

マレー語古典文学作品は、ヒカヤット（Hikayat）と呼ばれる散文物語のジャンルの作品が多く、最古のヒカヤットは14世紀初頭に遡る。ヒカヤットには神話、伝承、物語のほか、歴史叙述作品も含まれる。歴史叙述作品であっても虚構と事実が入り交じった記述が数多くなされ、年代表記がないものも多い。また、ヒカヤットの著者や原題の多くは不明であったり、一般的に知られているマレー語の書名が後付けであったりする場合も少なくない。

マレー語古典文学作品は、歴史のほか、マレー（人）の歴史観、王権概念、思想・信仰・慣習、集団・地域間の諸関係、社会状況など、当時の現地社会を読み解く手がかりとなる、貴重かつ重要な現地語史料である。しかし、そうした作品の利用に際しては、日本語の案内や解説の整備が十分ではないこともあって、作品に関する情報を入手し実際に作品に触れようとする最初の段階でも特に初学者には利用が難しく感じられる場合がある[2]。

本稿では、国立国会図書館関西館（以下当館）が所蔵するカルヤ・アグン（Karya Agung）叢書をもとにマレー語古典文学作品の世界の一端を紹介し[3]、それらの作品に対する関心及び利用の便宜の向上の一助を提供したい。

---

[1] 本稿でのマレー世界は、マレー半島、スマトラ島、ボルネオ島とその周辺地域からなる歴史的世界とする。マレー世界の対象範囲や意味には様々な定義があり、東南アジア島しょ部全体を指すことなどもある。

[2] 英語によるマレー語古典文学作品に関する案内・解説としては、Richard Winstedt, Y. A. Talib (rev., ed. and intro.), *A History of Classical Malay Literature*, MBRAS Reprint No. 12, 2nd Impression, Kuala Lumpur: Council of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, 1996（初版は1961年。当館は版などが異なる【KL151-5】などを所蔵）、Amah Haji Omar (volume editor), *The Encyclopedia of Malaysia*, Vol. 9: Languages and Literature, Singapore: Archipelago Press, 2004【(000007874206)】、Vladimir Braginsky, *The Heritage of Traditional Malay Literature: A Historical Survey of Genres, Writings and Literary Views*, Leiden: KITLV Press, 2004【(000007704888)】、Liaw Yock Fang (translated by Razif Bahari and Harry Aveling), *A History of Classical Malay Literature*, Singapore: ISEAS, 2013.【(025510694)】（原著名: Liaw Yock Fang, *Sejarah Kesusasteraan Melayu Klasik*, 2011.）などがある。

【　】内は国立国会図書館請求記号。国立国会図書館オンライン<https://ndlonline.ndl.go.jp/>で請求記号による検索ができない資料は、請求記号の代わりに【(　)】内に国立国会図書館書誌IDを記載した。ウェブサイト最終アクセス日は2022年1月31日。（以下同じ）

マレー語資料の出版状況については以下も参照。塩崎悠輝「マレーシア語資料の出版状況について」『アジア情報室通報』18巻2号, 2020, pp.2-7. <https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11510898_po_bulletin18_2.pdf?contentNo=1&alternativeNo=>

[3] 前近代のマレー語文献作品を中心としたコンコーダンスを提供する「マレーコンコーダンスプロジェクト（Malay Concordance Project）」<https://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>は150以上の作品から作成されており、各作品の項目には書誌情報なども簡潔に付されている。

1. カルヤ・アグン叢書の概要

カルヤ・アグン叢書は、基本的にマレー語古典文学作品を対象として、ジャウィで書かれた写本の原典からルーミーに翻字し、解説や校訂などを加えた作品の叢書である。

この叢書刊行の始まりは、マレー語古典作品の出版を計画し、後述する『ムラユ王統記』の原典研究を率いていたマレーシア政府機関の言語図書局（Dewan Bahasa dan Pustaka）が、同じく同書の出版を計画していた同国の団体「作家財団（Yayasan Karyawan）」に出版プロジェクトを委任したことに由来する[4]。作家財団は、1997年の『ムラユ王統記』の出版以降「カルヤ・アグン」の名を付けた叢書を出版してきた[5]。この叢書採録の諸作品はある意味で、作家財団がマレー語古典文学作品の代表と考えた作品といえる。

2. カルヤ・アグン叢書の特徴

カルヤ・アグン叢書採録の作品には、数多くの写本のほか、多くの翻字・校訂・翻訳・研究が古くから存在する。カルヤ・アグン叢書は基本的に、各作品の様々な写本やその翻字・校訂・研究を包括的にまとめ、新たな解説・分析・解釈を加えつつ、底本とした写本の翻字や校訂がなされている。そのため、諸写本間の語句・文章表記・内容の差異や翻字・校訂・解釈の差異などをまとめて確認でき、用語集や索引もあるため、利便性が高い。作品によっては底本にした原典（写本）の写真が付されており、その場合はジャウィの原文の一部または全文の確認もできる[6]。

図　当館所蔵のカルヤ・アグン叢書

3. 作品紹介

以下では、カルヤ・アグン叢書採録作品から当館所蔵のものを出版年順に紹介する。

①『スルタンの系譜（*Sulalat al-Salatin*）』[7]

現在では『ムラユ（マレー）[8]王統（年代）記（Sejarah Melayu）』の名で知られるが、元々の書名は『スルタンの系譜』であった。原書は、ムラカ（マラッカ）王国（14世紀末～1511年）の後継のジョホール王国（1530年頃～1718年）で1612年に編纂された。

ムラカ王国の王統史であり、アレクサンドロス大王に遡るとされる王統の神話的伝承から始まり、スマトラ島のパレンバンからシンガプラ（現在のシンガポール）を経たムラカ

---

[4] Tun Seri Lanang, Muhammad Haji Salleh (dikaji dan diperkenalkan), *Sulalat al-Salatin: ya'ni Perteturun Segala Raja-Raja (Sejarah Melayu)*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan dan Dewan Bahasa dan Pustaka, 1997, p.vii. 【Y735-S402】

[5] カルヤ・アグンは「偉大な作品」を意味する。作家財団と言語出版局の直接的な協同出版は、最初の数点で終了したようである。カルヤ・アグン叢書は当館未所蔵のものも多く、Worldcat<https://www.worldcat.org>や各図書館の書誌情報からも確かな情報を把握し難いが、現在までに著名なマレー語古典文学作品を中心に20冊以上が出版されているようであり、本稿の紹介で用いたような装丁に凝ったハードカバー版以外にもソフトカバー版がある。

なお、マレー語古典文学作品は、カルヤ・アグン叢書のような「硬派な」ものから一般読者・子供用に内容を適宜編集したり文体を平易にしたりしたものまで、基本的にルーミーに翻字された形で様々な種類のものが出版されている。

[6] 近年では写本の所蔵機関が写本をデジタルデータで公開している場合も多い。例えば、マレー語古典文学作品の写本を数多く所蔵するオランダのライデン大学図書館のデジタルコレクションのウェブサイトでは、掲載写本写真の閲覧・ダウンロードが可能である。<https://digitalcollections.universiteitleiden.nl>

ジャウィの綴りの読み方やジャウィ文書に関する目録・辞書などの工具書に関しては以下を参照。
西尾寛治・坪井祐司「マレーシアのジャウィ文献―文献の概観と研究工具の紹介―」『上智アジア学』20, 2002, pp.243-258. <https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000004605>; 山本博之「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方―20世紀のマレーシア地域を中心に―」『上智アジア学』20, 2002, pp.359-382. <https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000004610>

[7] 本作品の書誌情報は注4を参照。

[8] マレー語の「ムラユ（Melayu）」は英語の「マレー（Malay）」に対応する。

王国の建国、王国の繁栄、1511年のポルトガルの攻撃による王国の崩壊に至るまでの歴史が様々なエピソードとともに記されている。

②『**ハン・トゥア物語（*Hikayat Hang Tuah*）**』[9]

15世紀後半にムラカ王国のスルタン[10]、マンスール・シャー（Mansur Syah）に仕えたマレー人、ハン・トゥアの伝記物語。17世紀中頃から18世紀前半の間に成立したとされる。

作品内でハン・トゥアは、優れた知性、穏やかな物腰、武勇を備え、外国への使者も務めるなど内外で活躍し、スルタンの寵愛を得る人物であり、現在も人気がある歴史的英雄である。ハン・トゥアの親友ハン・ジュバ（Hang Jebat）が、ざん言によるハン・トゥアへの死刑宣告に憤りスルタンに反逆した際に、ハン・トゥアがスルタンの命に従い、親友ハン・ジュバを決闘で殺害した話は、ハン・トゥアの強い忠誠心を象徴する話として有名である[11]。

③『**メロン・マハワンサ物語（*Hikayat Merong Mahawangsa*）**』[12]

現在のマレーシアの北部、マレー半島中部を中心に位置したクダ（Kedah）王国（7世紀頃？～1948年[13]）の歴史叙述作品であり、書名は『クダ王統記』とも意訳される。口承文学からヒカヤットの形に最終的に編纂されたのは1800年頃とされる[14]。

王統や王国の起源に関する神話・伝承から始まり、クダ王国のイスラーム受容期までの歴史を主とする。建国者のメロン・マハワンサは、ローマ帝国の王統に連なり、中国とローマとの間の航海中に難破して建国の地に至って王となり、その後の第7代王のプラ・オン・マハワンサ（Phra Ong Mahawangsa）がイスラームに改宗した最初の王とされる。

④『**貴重な贈り物（*Tuhfat al-Nafis*）**』[15]

本作品は、ジョホール王国末期からその次に成立したジョホール・リアウ王国（1722～1824年）期の歴史を描いた歴史作品である。主役として登場するのは、ジョホール・リアウ王国のマレー人スルタンの下で副王（ラジャ・ムダ）の地位に就き王国の実権を掌握したダエン・マレワ（Daeng Marewa）をリーダーとするブギス人の一族である[16]。彼らは、各地の有力支配者層と婚姻関係を結び、ジョホール・リアウ王国の周辺地域にも大きな影響力を持った。

本作品は、ラジャ・ハジ・アフマド（Raja Haji Ahmad）とラジャ・アリ・ハジ（Raja Ali Haji）の親子によって1866年に編纂が完了した。彼らはダエン・マレワの一族に連なり、本作品ではその一族の活動を中心に、ジョホール・リアウ王国とその周辺地域の歴史が主に記される。本書は『ムラユ王統記』以降で最も重要な歴史書であると評され[17]、それまでの歴史叙述作品よりも事実叙述を重視した豊富な情報を持ち、各所で年代情報も記載されている。

⑤『**アチェ王統記（*Hikayat Aceh*）**』[18]

スマトラ島北部のアチェ王国（15世紀末

---

[9] Kassim Ahmad (dikaji dan diperkenalkan), Noriah Mohamed (pengenalan tambahan), *Hikayat Hang Tuah*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan dan Dewan Bahasa dan Pustaka, 1997.【Y735-K114】

[10] 東南アジア島しょ部では、イスラーム化の過程で、王権の正統性強化のために在地の君主が従来の称号に代えてこの称号を用いることがあった。

[11] 1960～70年代のマレーシアでは当時の社会的状況の影響を受け、ハン・ジュバが封建的社会構造に立ち向かった真の英雄として再解釈・再評価される動きがあった（Amah Haji Omar, *op.cit*.(2), p.87.）。

[12] Siti Hawa Haji Salleh (dikaji dan diperkenalkan), *Hikayat Merong Mahawangsa*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan dan Dewan Bahasa dan Pustaka, 1998.【Y735-S403】

[13] クダ王国の終期はクダ州政府の見解を用いた。

[14] Siti Hawa Haji Salleh, *op.cit*.(12), p.lix

[15] Raja Ali Haji, Virginia Matheson Hooker (dikaji dan diperkenalkan), *Tuhfat al-Nafis*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan dan Dewan Bahasa dan Pustaka, 1998.【Y735-A234】

[16] 優れた航海技術を生かした交易活動や武力で知られたブギス人は、17世紀後半から故郷スラウェシ島南部からの移住を活発化させ各地で活躍した。

[17] Winstedt, 1996, *op.cit*.(2), p.115.

[18] Teuku Iskandar (dikaji dan diperkenalkan), Hassan Ahmad (ketua editor), *Hikayat Aceh*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2001.【Y735-I181】

～20世紀初頭）に関する歴史叙述作品。アチェ王国全盛期の王であるスルタン・イスカンダル・ムダ（Sultan Iskandar Muda。在位1607～36年）の時代に成立した。

アレクサンドロス大王に遡るアチェの王統の神話的なエピソードから始まり、本作品の主役であるイスカンダル・ムダまでの各王の記述が続くが、作品の記述の主眼はイスカンダル・ムダの偉大さを讃えることに置かれている。本作品は、年代情報を記した「最初のマレー語の年代記」であるとされる（各王の即位年・死去年が付されている。）[19]。

⑥『ムラカ法典と海事法（*Undang-Undang Melaka dan Undang-Undang Laut*）』[20]

ムラカ王国末期のスルタン・マフムード・シャー（Sultan Mahmud Syah。在位1488～1511年）期にイスラーム法と慣習法を統合して編纂された法典であり、アチェ、クダ、パハン、パタニ、ブルネイなど、周辺国でも採用・再編纂された。

『ムラカ法典』では、王や臣下の資質、臣下の役職・権限、礼儀作法、土地の利用・相続、度量衡、民事や刑事（犯罪）に関連することなど、王国統治や支配者層・住民に関わる幅広い事項が規定されている。『海事法』は、船長・船の乗員の役務・権限や積荷に関する法典であり、『ムラカ法典』の一部であるが、徐々に『ムラカ法典』と分けて単独の法典として扱われるようになっていった。

⑦『お伽物語集（*Cerita Lipur Lara*）』[21]

古来からのマレーの口承文学を収録したものであり、本叢書は5つの作品を収録する[22]。書名のcerita lipur laraは直訳すると「悲しい心を慰める物語」の意味であり、王族が物語の主人公を務めるのが典型例である。

収録作品の一つである『ラーマ王子物語（*Cerita Seri Rama*）』は、インドの叙事詩『ラーマーヤナ』の口承版をもとにして12世紀以降にマレー語のヒカヤットとして成立したとされる（17世紀前半の写本が存在する。）。『ラーマ王子物語』のあらすじは『ラーマーヤナ』とほぼ同一だが、イスラームの影響などの結果、登場人物の描写に違いが出るなど、物語の「現地化」が生じている。

⑧『アブドゥッラー物語（*Hikayat Abdullah*）』[23]

マラッカで生まれ、同地とシンガポールで多くを過ごしたアブドゥッラー（1797～1854年）が1849年に出版した自伝で、マレー近代文学の先駆的作品とされる[24]。

アブドゥッラーは、アラブ人、タミル人、マレー人の血を引き、13才でシンガポール建設の父であるラッフルズ（Raffles）の書記となり、ヨーロッパ人にマレー語を教えた。

当時のシンガポール社会を写実的に生き生きと描いた点、一人称の使用やこれ以前のマレー語古典文学作品で使用されるマレー語とは異なる文体・語彙で書かれた点が特徴的とされる[25]。

⑨『書記の花園（*Bustan al-Katibin*）』[26]

本作品はマレー語に関する最初期の文献で

---

[19] Braginsky, *op.cit*.(2), p.348.

[20] Kiaw Yock Fang (dikaji dan diperkenalkan), Hassan Ahmad (ketua editor), *Undang-Undang Melaka dan Undang-Undang Laut*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2003.【Y735-L52】

[21] Mir Hassan dan Pawang Ana (tuturan), Mohd. Taib Osman (dikaji dan diperkenalkan) dan Hassan Ahmad (ketua editor), *Cerita Lipur Lara*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2004.【Y735-M199】

[22] *Cerita Seri Rama*、*Cerita Malim Dewa*、*Cerita Malim Deman*、*Cerita Anggun Cik Tunggal*、*Cerita Raja Muda*の5作品（Cerita以下は、称号名であるRaja Muda以外は人名）。
他の文献では、Ceritaの代わりにHikayatの語句が使用されることがある。

[23] Abdullah bin Abdul Kadir Munsyi, Kassim Ahmad (dikaji dan diperkenalkan), Hassan Ahmad (ketua editor), *Hikayat Abdullah*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2004.【Y735-A235】

[24] 本作品には日本語訳がある。アブドゥッラー（中原道子訳）『アブドゥッラー物語—あるマレー人の自伝—』（東洋文庫　392）平凡社, 1980.【KL151-8】

[25] 同上, pp.298-299.

[26] Raja Ali Haji, Hashim bin Musa (dikaji dan diperkenalkan), Hassan Ahmad (ketua editor), *Bustan al-Katibin*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2005.【Y735-A686】

あり、④『貴重な贈り物』の編纂者であるラジャ・アリ・ハジが1850年に書いた[27]。彼にとってのマレー人のマレー語学習は、単に文法・発音・綴りを学ぶものではなく、神が創造した世界について真の知識に至るために人間が創造的に用いる思考法・思考手段であった[28]。

『書記の花園』は子供のマレー語学習者を念頭に書かれており、その内容は、ジャウィ表記、マレー語の品詞、節と句、構文論（統語論）、文書作成時の留意点や望ましい敬語表現、手紙の書き方・定型句からなる。

⑩『マレー小話集（*Cerita Jenaka Melayu*）』[29]

本叢書ではマレーの伝統的な小話が11点収録され、動物が物語の主人公である話もある。書名にあるJenakaはユーモアを意味するが、ユーモアを多く含むこうした風刺話は、マレー人にとって娯楽作品であり、知識や教訓を学ぶツールでもあった。

例えば、『カドゥおじさん（*Pak Kaduk*）』は、村に住む貧乏で迂闊なカドゥおじさんを主人公に、彼が様々な不運と失敗を経る様子がユーモアと哀れみを交えて語られるが、彼の不運や失敗が思慮の足りなさ故の結果であるように表現されることで教訓的な話となっている。

⑪『パンジ・ジャエン・クスマ物語（*Hikayat Panji Jayeng Kusuma*）』[30]

口承やワヤン（影絵芝居）で伝わったジャワのパンジ物語[31]を元に成立した、著者不明のマレー語のヒカヤット。マレー語のパンジ物語の写本は写本によって題名表記が異なる場合があるが、本叢書版ではパンジ物語であると分かるよう「Panji」の言葉を書名に付している。[32]

元々のヒンドゥー・ジャワ的なパンジ物語の形態・内容をほぼ保持しているが、イスラームやマレー文化の要素が追加されている。

⑫『チュンティニの書（*Serat Centhini*）』[33]

原書は、1814年にジャワ島スラカルタの宮廷で編纂された、全12巻のジャワ語の作品。ジャワに関する百科事典的な作品で、イスラームや神秘主義などの思想や、歴史、慣習、説話、農業、建築など、ジャワに関する多彩な知識が記述される。

カルヤ・アグン叢書版では、原書からイスラームに関する部分を抜粋し、ジャワ語からマレー語に翻字・翻訳して対訳させて編集されており、カルヤ・アグン叢書の他作品とは編集の性格が大きく異なる。[34]

おわりに

カルヤ・アグン叢書は、国内では当館以外に東京外国語大学附属図書館が所蔵しているが、どちらも出版された全てを所蔵してはいない。未所蔵分の入手によって、マレー語古典文学作品に関する所蔵資料の拡充、当館所蔵資料の特色の強化、利便性の向上などが期待できる。[35]　（とみた　あき）

---

[27] 正式な書名は、『学びを求める子供のための書記の花園（*Bustanu al-Katibin li's-Sibyan al-Muta'allimin*）』（*ibid*., p.xiii.）。

[28] *ibid*., p.vii.

[29] Mohd. Taib Osman (dikaji dan diperkenalkan), Hassan Ahmad (ketua editor), *Cerita Jenaka Melayu*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2007.【Y735-M389】

[30] Abdul Rahman Kaeh (dikaji dan diperkenalkan) , Hassan Ahmad (ketua editor), *Hikayat Panji Jayeng Kusuma*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2007.【Y735-A441】

[31] 東部ジャワの宮廷を舞台とし、文武両道で魅力に富んだ理想的王子を主人公に、彼がパンジなど多数の異名を使いながら、行方不明になった許嫁である他国の王女を探し結ばれるまでを描いた作品の総称。

[32] Abdul Rahman Kaeh, *op.cit*.(30), pp.vii, xiv-xv.
本作品名の別名には、*Hikayat Misa Taman Jayeng Kusuma* などがある（Hikayat以下は人名）。

[33] Noriah Mohamed, Ghazali Basri and Singgih Wibisono (dikaji dan diperkenalkan), Zainal Abidin Borhan (ketua editor), *Nilai Islam dalam Serat Centhini*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan, 2013.【Y735-TS-5009】

[34] ジャワ島のジャワ語の作品をカルヤ・アグン叢書で出版する理由に、この作品がジャワ文化の世界観と混ざり合ったイスラームの価値を示していることが挙げられている（*ibid*., p.viii.）。
また、原書（底本）にある性的な描写は叢書版では編集で削除されている（*ibid*.）。

[35] 未所蔵の例としては、東南アジアで最初にイスラーム化したサムドラ・パサイの歴史叙述作品である『パサイ王国物語（*Hikayat Raja Pasai*）』がある（Russel Jones (dikaji dan diperkenalkan), *Hikayat Raja Pasai*, Kuala Lumpur: Yayasan Karyawan dan Dewan Bahasa dan Pustaka, 1999.）。この作品の日本語訳には、野村亨訳注『パサイ王国物語—最古のマレー歴史文学—』東洋文庫　690）平凡社, 2001【KL111-G1】がある。